6

制服選択制が始まるまで

男子はズボン。女子はスカート。性別で分けられた学校での服装指定に苦痛をおぼえる子どもたちがいます。岡山大学の中塚幹也教授らによると、性別への違和感を訴えて同大のジェンダークリニックを受診した性同一性障害当事者約一〇〇〇人のうち、約六割に自殺を考えた経験があり、約三割に不登校の経験があったそうです。自殺念慮や不登校は小学生の頃から見られますが、中学生でピークとなり、その背景には性別で分けられた学生服を着なくてはいけないことがあると中塚先生は指摘しています（「新型コロナで男女別の分散登校　追いつめられるトランスジェンダーの子どもと制服の選択制」https://news.yahoo.co.jp/byline/mikiyanakatsuka/20200728-00190151/）。

昨今では、性別で限定せず、好きなスタイルを選べる「制服選択制」の導入を始める学校も広がりつつあります。性別に違和感を持つ子どもたちへの配慮だけでなく、性別にとらわれない生き方について子どもたちに考えてもらうきっかけになったり、防寒対策の面でも役に立っています。

制服選択制を導入した学校ではどのようなやりとりが行われていたのか、この節は、神奈川学

園中学・高等学校と、埼玉県立川口北高等学校の生徒や先生方に、お話をうかがいます。

すぐ溶け込んだスラックス制服

神奈川学園中学・高等学校は、私立の女子校です。二〇二〇年九月から高校でのスラックス制服導入が始まりました。インタビューしたのは二〇二一年二月です。当時、高校三年生で生徒会長だった板谷莉那さんは、「スラックスを履いている子は学年に何人かいる。嫌悪感とか違和感は全然ない。あー履いているんだ！って肯定的に受け止められている」と語ります。

もともと学校では性の多様性について話題に上ることが多くありました。学年で研究テーマを決める「探究の授業」で、板谷さんはジェンダーに関する差別を学ぶ班に所属しました。東京大学の入学式で上野千鶴子教授が読んだ祝辞についてどう思ったか、外見によって判断されることをどう感じるか、「かわいい」という言葉についてどう考えるか、同級生とディスカッションして、最後に学校に提案したいことを生徒たちが書く時間がありました。

そこで一人の生徒が「スラックスの提案はどうか」と発言をしました。神奈川学園にはスカートの制服しかない、性別にかかわらず制服を選べるようにする学校が近年では少しずつ増えている、自分たちの学校でも導入したらどうか、という意見です。

板谷さんは、それまでにもスラックス制服の女の子を街中で見たことがありました。「最近はＬＧＢＴの認知度も広まってるし、スカートは寒いし、あったらいいよね」という話を友達としたことも、それまでにありました。

こうして二〇一九年の年明けに、クラス委員の間でスラックス制服の導入についてどう思うかの話し合いが持たれました。クラス委員からの反対はなく、生徒会でも肯定的な意見が出ました。

「スラックスが翌年に導入されて、生徒の意見を学校がくみとってくれたと思ってうれしかった。実際にスラックスを履く人たちを見て、やってよかったと思えました。学校が性の多様性に取り組んでいることを、誇りに思います」と語る板谷さんは、高校卒業後は大学でジェンダーについて学びを深める予定だそうです。

なんでこれまでしてこなかったんだろう

板谷さんたちからの要望で実現したスラックス制服の導入ですが、実は教員の間でも以前から「そうなればいいよね、やればいいよね」という意見があったそうです。「教員も生徒も、いつ取り組み始めるかだけの問題になっていました」と語るのは森坂創子先生です。学校にはもともと反対する人はいませんでした。

生徒の声を受け、教員主導で制服選択制に向けて動くことになりましたが、いざ選択肢を増やそうとなると森坂先生の中には「なんでこれまでしてこなかったんだろう」という焦りが出てきました。以前から、困りごとをなんでも書いていいアンケートの自由記述欄に、「女の子であることに違和感がある」と書いてくる子がときどきいました。スラックス制服導入の提言をしたのは板谷さんたちが初めてではなく、五年前から同様の提案をする生徒はいたのです。

髙橋文恵先生は、生徒に呼び出されてカミングアウトされたときのことを思い出しました。

「スカートを履くのがつらいんです。たぶん、性自認とからだが一致していないんだと思います」

そう訴える生徒に「スカートの下に短パンを履いていいよ。それで違和感が軽減できるなら」としか答えられなかったことが、髙橋先生には心残りでした。

「二〇年前から教員としてずっとジェンダーの話をしていたのに、制服を変えることが思いつかなかった。学校という場所は昨日が今日になって、今日が明日になって、そうやって時間がどんどん経ってしまう。だから声を上げてくれる人がいたことは大切でした」と髙橋先生は話しました。

スラックス制服導入は「大人の責任」と感じるようになった森坂先生は、制服の業者に相談をして、デザインや生地選びを始めます。こうしていざスラックス制服の見本ができあがったときには、感無量だったそうです。

「もともと学校の内部に多様性が当たり前という土壌があって、その中で教員も生徒も考え方がマッチしてすんなり決まっていったのがよかったと思います。スラックスかスカートかを日替わりで選んでもいい。そういう多様性が日常の中にあることが、誰にとっても楽な環境にもつながっていくと思います」

高校でのスラックス制服導入とあわせて、中学校ではキュロットの導入も始まりました。